

甜花ちゃんの大冒険

ドラソードP

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは283プロのとある日。久しぶりに午前中がお休みだった甜花ちゃんはゲームでもしようか、それとも最近寝足りないから二度寝でもしようかと、貴重な空き時間の使い方について考えていた。しかし、そんな中甜花ちゃんは机の上に置かれた『それ』を発見してしまい??

「大変なことになっちゃった?!?!」

そんな一言から、甜花ちゃんの壮大な冒険は始まろうとしていた。

目次

プロローグ 甜花、気がついてしまう	1
第一話 甜花、冒険に出る	3

プロローグ 甜花、気がついてしまう

プロローグ

甜花、気がついてしまう

「大変なことになっちゃった……!!!」

それはとある日のプロダクション、なーちゃんが仕事のために部屋を出ていって数分後に発覚した重大な事件だった。

「どうしよう??もうなーちゃんはプロデューサーさんと車に乗ってお仕事にでかけちゃったし……」

その日、甜花はいつも通りの時間になーちゃんと一緒に来て、なーちゃんや千雪さん、プロダクションのみんなと楽しくおしゃべりをしたり、朝のレッスンの準備をすすごしていた。そして、特に何事も起こることなく平和に流れていく時間。

「もう、追いかけても間に合わないかな……」

今日はプロデューサーさんとなーちゃんは仕事の為、朝から一日中ずっと出かけることになっていた。そして甜花は、午後まで仕事もレッスンも予定は無い。だから今日、甜花は午前中の間だけアイドルお休み。

「??よし、甜花決めた。なーちゃんには悪いけど、甜花は今日、午前中お休みだから??」

午前中は精一杯ダラダラと過ごし、午後はレッスンをちよつとだけ頑張つて、その後はなーちゃんとおプロデューサーさんの帰りを待つ。そしてなーちゃんとお家に帰つて、一緒に買ったばかりの新作のゲームをする。そう予定を立てていた。

「??そう、お休みだから??」

立てていた、のだった。

「??でも??もし、それでなーちゃんが仕事を失敗したりして、大変なことになっちゃったりしたら??」

しかし、そこで事件は起きてしまった。

「あうう???どうしよう???」

葛藤する心。目の前にあるふかふかのソファが甜花を呼んでいる。

ああ、寝転がりたい??あそこに寝転がりながら、ひたすらにいたらだとゲームがしたい??たくさん気が済むまでお昼寝をしたい??悪魔の格好をした甜花が甜花を呼ぶ。

「なーちゃん、ゲーム、なーちゃん、お昼寝??!」

最近はお仕事続きで、お休みなんてほとんど無かった。お家に帰っても仕事やレッスンの疲れで、ゲームをやる前に眠くなってきて寝ちやうし。

「天使の甜花と、悪魔の甜花がぐるぐる??」

まあ確かに、それはアイドルとしてなーちゃんと一緒に輝けているという意味で嬉しいことであって、決して悪いことじゃない。でも、だからこそ、甜花は久しぶりに貰えたこのお休み時間を、心の底から凄く楽しみにしていた。

「??いや」

でも、そんなだったらと過ごすお休みと同じくらいに、甜花はなーちゃんのことが大好き。

「甜花は、なーちゃんのお姉ちゃんだから?!」

だから、なーちゃんが悲しむ姿なんて甜花は見たくない。

「甜花、やっぱり頑張る?!!!」

突如としてなーちゃんに迫る重大な危機。それを防ぐ為に甜花は、勇気を振り絞ることにした。

「お弁当、届けなくちや?!」

そう、なーちゃんはお弁当を忘れてしまったのである。

第一話 甜花、冒険に出る

第一話

甜花、冒険に出る

～A M 8:35～

さて、とかなんとか、甜花は葛藤の末、なーちゃんのためにお弁当を届けることにした。

「確か、取材ロケのお仕事って聞いていたけど??」

しかし、早速大きな問題にぶつかってしまおう。そう、甜花はまず、なーちゃんとプロデューサーさんがどこに行つたのかをそもそも知らなかった。

事務所のテーブルに置かれたそれを手に取り、いざ出発??と意気込んだままでは多分良かったんだと思う。でも、なーちゃんとプロデューサーがどこに行つたのか分からないのでは、そもそもどこにも行きようが無かった。

「あうう??」

甜花、早速大ピンチ。

「どうしたらいいんだろう??」

甜花は考えた。甜花は勉強はあまり得意では無い。しかし幸いにも、甜花は考えるところということ自体は不得意でもない。むしろ、色々なゲームで色々なことを考えて、悩んで、解決してきたお陰で好きな作業の内にも入るのかもしれない。

「とりあえず、なーちゃんに電話する??? それとも??プロデューサーさんに???」

恐らく、ここまで頭を働かせたのはつい先月、仕事の合間を縫って挑戦し続けようやくクリアした、あの超難度のアクションゲーム以来かもしれない。でも、それほどなーちゃんのピンチは甜花にとっても重要なことだった。

「でも??もし、車の中や電車の中だったら迷惑になっちゃうかもしれない??メールだと、時間がかかっちゃうし??」

できればなーちゃん達にはお仕事に集中してもらいたい。もし仮

に、今日のお仕事が重要なお仕事だったとしたら、その打ち合わせ途中だったとしたら、甜花が電話やメールをしてしまったが故に流れを止めてしまったとしたら、それはそれでとても申し訳なくなってしまう。

「それに??」

それに、甜花にはもう一つ違った思いがあった。

「??甜花だって、やればできる子だから」

これは完全に個人的な話になってしまいうのかもしれない。だけど、甜花は内緒でお弁当を持って行って、二人がお弁当を忘れたことに気が付く前に届け、甜花だってやればできる子だって見直してもらいたいという気持ちもあったのだ。そう考えると、二人への連絡は最終手段としておきたいと、そう甜花は思った。

「??例えばこんな時、ゲームの主人公ならどうするだろう??」

甜花は更に考えた。いつもゲームをプレイする時、行き詰まったらまず何をするのか。何をしてピンチを乗り越えたのか。今までの経験を総動員し、この問題に向き合う。

「??そうだー!」

そして甜花は閃いた。

「??はづきさん!」

例えばそれはRPGゲーム。広大な世界を旅するRPGゲームなどでは、次の目的地を見失ってしまうことも少なくはない。道に迷ってしまった、もしくはやるべき事が分からなくなった。そんな時の鉄板はまず『近くに居る人たちへの聞き込み』をすることに限ると。

「はいー? 何ですか、甜花ちゃん?」

「はづきさん??プロデューサーさんとなーちゃんが今日、どこに行っただか知ってる??」

甜花がそう聞くと、はづきさんは慣れた動作でパソコンに何やらカタカタと打ち込み始めた。そしてしばらく何かについて調べたかと思うと、作業の手を止めた。

「えーつと??確か二人は今日、渋谷の方に??」

「しつ??渋谷?!」

ああ、なんとということだろう。甜花、再びの大ピンチ。なんと今はづきさんの口からとんでもない言葉が飛び出してきた。

『渋谷』

流行の最先端。若者が集う街。多くの人々が日々行き交う、日本屈指の大都市。しかし、そんなことよりも一番の問題が甜花の前には立ちばかる。

「そうですね。なんでも、ファッションの最先端についての取材と撮影のために、色々なお店を巡るとか??らしいですね」

「渋谷??人や車??いっぱい?」

そう、知つての通り甜花は、人混みが大の苦手だ。

「あつ、あうう??」

渋谷の人混みを想像しただけで頭がくらくらしてくる。様々な人々の話し声や環境音、息苦しくなるほどの人の密度。そして何より、自分より可愛いく、魅力的に見えてしまうオシャレな人達。甜花にとって渋谷は、まさに踏み入れるだけで精一杯な魔境都市、最高難易度のダンジョンだった。

実を言うと渋谷には、ごくたまに仕事や、休日のお出かけで行ったことはあることにはある。けれども、そういった時はなーちゃんやプロデューサーさんなどの、誰か信頼できる人が必ずそばに居た。でも、今回はそんなプロデューサーさんやなーちゃんも居ない。だからこそ、甜花にとって渋谷という言葉は諦めるのに充分な言葉だった。「??やつぱり、届けに行くのはやめにしようかな??」

物事には諦めが肝心、ということもまたゲームから学んだことだ。よく、いくら強い敵や難しいステージでつまづいたとしても、諦めない心が大切とは言われがちだ。しかし、全く勝ち目が無いのに無駄に時間を消費することは、あまり得策ではないとも甜花は知っている。時にはきつぱりと諦めて、お昼寝をする勇氣も必要だ。

「えつと??とりあえず、教えてくれて、ありがとうございました??はづきさん」

「いえいえ」

情報を教えてくれたはづきさんにお礼を言った後、甜花はゆっくり

とソファに腰掛けた。

「ごめんね??なーちゃん??悪いのは全部、渋谷のせいなんだ??」

甜花は全ての責任を渋谷のせいにして、お弁当を届けに行くことをきれいさっぱり諦めた。だって、ダメな物はダメだから。決してやっぱり行きたくなくなったとか、そんなことではない。決して、決して。「さてと??午後のレッスンにそなえて、たくさんお昼寝しなきゃ??」

そう言っつて、うとうととしながらソファに寝そべろうとした次の瞬間、部屋には一人の声が響き渡る。

「あー!! 何ですかそれ!! とつても面白そうです!!」

声の主、それは事務所に所属するアイドルである小宮果穂ちゃんの声だった。

「??ん? これ?」

果穂ちゃんの声に反応した人物がもう一人。先程から事務所の窓際で、黙々と手元の小さな機械をいじっていた芹沢あさひちゃんだった。

「実はわたしもよく分かってないんだけど、これは多分、ちよつと前に流行った携帯育成ゲームだと思う」

「携帯育成ゲーム?!?!」

「最近家の整理をしていたら、棚の奥から出てきてさ。気になったから事務所に持ってきたんだ」

あさひちゃんの言葉に、果穂ちゃんはその目を眩しいくらいに輝かせる。確かに、あさひちゃんが持っている携帯育成ゲームは一昔前に流行ったものだ。丁度甜花は世代に被っていたため話が分からなくもないが、二人からするとそれは珍しい物になるのかもしれない。

「一応、電源を入れたら動いたんだけど、データが最初からなくなって何が何だかよく分からないんだよね。それにわたし、そんなにゲームとかには詳しくないし」

「でも、育成ゲームってなんだか面白そうですっ! ゲームの中で生き物が生きているなんて、まるでこの前見たヒーロー番組に出てきた、コンピューターウイルスの怪人みたいですか?」

「んー??なんだよくわかんないけど、そんなに気になるならやってみ

る？果穂ちゃん」

「はい!!」

そう言って果穂ちゃんはあさひちゃんからゲームを受け取る。途端に果穂ちゃんは満面の笑みを浮かべて、その小さな機械をいじり始めた。

「うーん??あたしもなんだかやり方が分からないです。何かマークが出ているんですけど??もしかしたら、お腹が空いているんでしょうか?」

『お腹が??空いている??』

「あー、確かに肉のマークが出ているし、もしかしたらそうなのかも」
「このボタンは違うし??このボタンは??あれ?? なんか画面が変わっちゃいました」

「あー、ちよつと貸して！ それは多分オプション画面だと思う。餌やりは確か??」

二人は小さな機械を互いに取り合いながら必死にプレイをしている。何やら気になるワードこそあったものの、甜花は深いことは考えないようにした。

「ああ??あさひさん！ なんだかさつきより、この子の元気がないように見えます！」

「うーん、説明書でもあれば良いんだけど??ん?」
「ん?」

と、甜花はあさひちゃんと目が合う。

「丁度いい所にゲームに詳しくそうな人が！」

そう言うにあさひちゃんは、まるで飛んでくるかのような勢いで甜花の所に走ってきた。

「甜花ちゃん、ちよつとこれのやり方わからないっすか？ ゲームに詳しい甜花ちゃんなら色々やり方とか分かりそうっすけど」

「えっ、えーつと??うん、分かった」

甜花はあさひちゃんからその卵ほどの小さなサイズをしたゲーム機を受け取った。そして、目を凝らしてその小さな画面を確認する。
「??あつ」

しかしどうやら、時は既に遅かったみたいだった。画面には十字架と共に幽霊のキャラが映し出されていて、死んでしまったことが読み取れた。

「どうつすか?」

「えっと??多分、もうお腹が空きすぎて??死んじゃったみたい」

「お腹が、空きすぎて??」

「??お腹が空いて、死んじゃった?!?!」

「ん? どうしたんすか?」

途端に甜花の頭の中には、なーちゃんの姿が映し出される。

『甜花ちゃん??お腹が空いたよ??』

『うーん??お腹が空いて力が出ないよ?』

『甘奈、もうダメかも??』

その瞬間、甜花の体から血の気が引いていくのがわかった。

「??大丈夫つすか?甜花ちゃん。なんだか顔色が悪いっすけど」

「??甜花、やっぱり行かなくちゃ」

「ん? 行ってくてどこに行くんすか? 確か甜花ちゃんは今日、午前

中は休みで仕事とかレッスンの予定は無かったんじゃないんすか?

「

「うん??そう。でも??」

それでも、助けに行かなければいけない人が居る。

「??甜花を、待っている人が居る」

甜花の助けを待っている、大切な人が。

「だから、甜花は冒険に行かなくちゃ?!」

「冒険?!」

甜花の言葉に、二人は今日一番の笑顔を見せ、顔を合わせる。

「今、冒険って言わなかったっすか!」

「冒険!! 冒険ですか!」

「ひいん!」

詰め寄ってくる二人の勢いに押され、思わずびっくりして声が漏れる。

「せつ??芹沢さん??」

「それならちようど、わたしも暇をしていた所なんすよ！ だからわたしも、冒険に連れて行ってくださいっす!!」

「あつ、あの??」

「隠そうとしても無駄っすよ!! もう聞いちゃったっすからね！ わたしの耳はごまかせないっす！」

「冒険だったら、あたしも連れて行ってください！ あたしもあさひさんと同じで、ちょっと退屈をしていた所なんすっ！」

「果穂ちゃんまで??あう??」

さて、これは困ったことになった。いくら一人で行くのが不安とは言ったが、全く無関係の、しかも自分より年下の小学生と中学生の二人を巻き込むとなると、少し気が引ける。それに、元氣いっぱい二人は、甜花一人で面倒を見切れるのか少々不安が残る。

「でも、冒険って一体どこに行くんすか？ とうか、そもそも目的はなんなんすか？ 宝探し？ 未開の地の探索？」

「目的地は??渋谷??!」

「おお!!」

「目的は??お弁当を忘れたなーちゃんのために、お弁当を届けに行くこと??!」

「すごいですーっ！ 甜花さん、甘奈さんにお弁当を届ける為だけに、渋谷まで行くんですか!?!」

「うん??」

甜花は小さく頷く。まるでもう行くことが決まったかのような反応をする二人に、二人がついてくることを断りにくくなってしまうた。

「まあわたしは理由なんてどうでも良いっす。楽しそうなことができたら、それだけで充分っすからね!」

「誰かのために何かを頑張るのは、ヒーローの仕事です！ だったらあたしも、甜花さんを手伝いたいっす!」

甜花は申し訳なく視線を下げる。

「でも、元はと言えば甜花の勝手なお節介だし??二人を付き合わせちゃうのは??!」

「別について行くのはわたしの勝手っすし、そんな細かいことは気にしないでいいんすよ」

『ヒーローは助け合いでしょ』って、そうあたしの大好きなヒーローが言っています！ だからあたしも、甜花さんを助けます！」

すると、果穂ちゃんが甜花の手を握ってきた。

「一緒に、甘奈さんを助けに行きましょう！」

「はいっすー！」

甜花が顔を上げると、そこには純粋な笑顔をした果穂ちゃんとあさひちゃんが居た。

「??芹沢さん、果穂ちゃん?!!!」

そして甜花は、二人を信じてみようと思った。

「それじゃあそうと決まったなら、早く冒険に行きましょうっす！
時間は待つてはくれないんっすから！」

「まずは冒険の準備ですね！ 今日外も暑いですから、水筒に、ハンカチに??」

「はづきさーん！ わたしたち、ちょっと出かけてくるっす！ 午後のレッスンの時間までには戻るっす！」

こうして、甜花達の壮大な冒険は今、ここから始まろうとしていた。正直な所、なんだか色々と不安になるメンバーかもしれないけど??

「さあ、甜花ちゃんも準備が終わったら早く行くっすよー！」

「困っている甘奈さんを、助けに行きましょう！」

「??うん!!」

けど、この二人と一緒になら、不思議となーちゃんにお弁当を届けられる気がした。